

法然上人の開宗と思想の一考察

淺野忍英

偉大なる法然上人に就て限られた紙幅に於て筆をさる。凡そ大人物は時代の要請に應じて現れ、そしてその時代を導き抱くものである。が、上人は單に時代に規定された一存在ではなくて、逆に時代を指導し支配して行つた平安朝末の日本が生んだ宗教的偉人である。が然し上人も時代の人で、時代の空氣を呼吸してゐられるから、上人の思想を考へる前に一應、開宗前後の時代精神を考察する事は無駄ではなからう。

一

上人の立教開宗は高倉天皇の承安五年三月、上人四十三歳の春である。これを政治史上から觀れば、平安朝末保元平治の争亂。君臣骨肉互に敵味方に鎬を削る殺戮に、花の都は修羅の巷、血腥い風が全國に漲り、義朝が野間て死するや所謂平安專横の時代となり、清盛の傲奢權勢は彼の一顰一笑が萬人の注視するに至つた。然しその反動として彼に對する嫉妬怨憎は、俊寛等の鹿ヶ谷の密談となり、亦源三位頼政の擧兵となつたが共に敗北の苦杯をなめ。却つて清盛の勢力をそゝるに過ぎなかつた。然しやがて福原の遷都で民望を失ひ、頼朝の伊豆擡頭に心を煩はした彼は自らは熱病に囚はれ、日々に衰運に向ふ一門の行末に心を殘しながら悶死せねばならなかつた。壽永二年七月には木曾義仲が、都の遊惰に馴れた平氏を破つて京都に亂入した。「われ聖教を見ざる日なし。たゞ木曾冠者入洛の日一日見ざりき」と、當時叡山を去つて京に居られた法然上人の述懐から考へても、義仲が洛中に亂入した事は、靜かな庵まで騒がせ、素より市

民の狼狽は非常なものであつた事が知られる。義仲は翌年粟津で敗死し、一ノ谷の戦屋島・壇ノ浦に四年三月平家一門西海の藻屑を消え、頼朝の鎌倉幕府の開創となる過渡期で、戦亂の絶間のなかつた時代であると共に、天變地異が續出した時代である。

二

平安朝末期は斯く、白旗と赤旗入亂れ、保元平治の亂は一時平氏の世となつたが、次で赤旗が墜ち殿上人から坂東の荒武者へ政權が落着く轉移の時代であるが、これから時代の心に就て考へよう。上人の出現を理解するためには、時代の宗教のこころは考へる必要がある。

大化以來、平安初頭の國家的統一も内憂外患遠ざかるに及び、權臣專横の現象となり、經濟、文化凡て藤原氏を中心とする貴族的國家となつた。平安朝末の貴族社會！優美なる束帶、十二單、かくて花の晨月の夕に詩歌・管絃の遊惰に流れた寢殿造の生活。厄介な儀式作法のつき纏ふ貴族の年中行事。それは彼等を退嬰的な倦怠の世界に誘ひ行く。然し吾々はこの陰に重税に泣き衣食に窮する地方民の勃興して來てゐる事を見逃がしてはならぬ。争亂は人心に不安と恐懼を抱かしめる。君臣骨肉相殺戮した保元平治の戦亂に加へて、惡疫天變地異の續出。これは如何に社會を憂鬱と戦慄と絶望のどん底へ陥れた事だらう。而も衆生を救済すべき宗教界はどんなであつたか。「コーランが然らずんば劍か」こはマホメットの熱烈なる宗教宣傳の標榜なるが、此處に私は平安末の僧兵を思ひ出す。山王の神輿を振り翳す山法師。春日の神木を擔いで暴れる奈良法師には朝廷も宸襟を煩はし給ふた事であらう。寔に僧徒が甲冑に戦場の蒼を往來する云ふ末法末世的現象を現出してゐた。千仞の谷底に迷へる小羊の群こそ當時の一般民衆の心であつた。

當時の佛教は一方山岳佛教の眞摯な求道者もあつたが、彼等は自業自勵に孜々として、身をもつての實行派である所の遁世僧であつた。然し彼等はこもするに無執著に執著し易い。俗塵に浮沈する人を輕んずる事を知つてこれを抱く事

を忘れる。そこからは救済の福音は下らなかつた。他方常寂光土の思想は中期に至り誤つて快樂説となり、天災地變の續出に世は修羅の巷に化し、現世の利益を求め不幸から逃れるため、陰陽道夢等の迷信に結付きつゝ加持、祈禱的な佛教となつた。其處には當然「物」を必要とする有産階級の佛教となり、今昔物語に「奉る蓮の上の露ばかりこれを哀れむ三世の佛も」云、祈禱料の一物もなき哀れな女が、親の追善の爲自分の衣物を脱ぎ佛前に訴へる衷情は誠にいぢらしい。この祈禱佛教は又一方貴族の寄附する庄園が増加して、寺院は資本家となり、従つて此處に僧侶の安逸墮落に對し、或は亦資本家に對する無産階級の反旗が擧る。そこへ保元平治の亂。こゝに必然「物」を必要とせぬ無産宗教の要請が起つて來た。

この時代は個人意識の發達が眼につく。そして王朝貴族の頽廢からも見られるが、無常觀と罪業意識は最も強く武士の體驗から喚起されて來る。道德的な惡をも敢て犯さねばならぬ武士が救はれるものは、當然理性道德を超越した宗教でなければならぬ。お前に惡云ふ役割をさせてすませぬといふ黑白正邪共に抱擁するものでなければならぬ。彼の甘糟太郎忠綱の「弓箭の家業をも捨てず往生の素意をも遂ぐる道」これが武士の衷心よりの願望であつたと思ふ。斯く考へるに法然上人の弟子に武士の多かつた事が首肯される。かくして迷へる小羊は「聖者出でよ」と一大宗教的偉人の出現を祈つてゐる。この時代の要請に應じて出世され彼等をその懷に抱かれたのが吾法然上人である。

三

公卿に代つた平家全盛も一朝の夢、義仲義經の豪勢も春の夢の如く、賴朝の天下に移るあわたしき、陰陽道等の迷信に左右され、末世思想の影響を受け全く無氣力な最早現實に何の望みも執著もなく、退嬰的な彼等には精神的破産の一途を辿るに過ぎなかつた。彼等には法爾自然の道理こそ如何に欣求された事だらう。然し自然法には宗教的感激がない。冷靜な世界には救ひが望ましい。それが頽廢期に於ける願望である。兩親を早く失つた上人には常に水のしたゝる

やうな潤ひのある愛に接したかつた。「父の遺言忘れ難くして」遂に佛の中に永遠の両親を見出された。

不斷念佛や空也、良忍の民衆化された念佛等が法然上人以前にあつたのであるが、それらは己れの申す「この念佛の功德」に熱中して、彌陀の本願を忘れてゐた。そこには何の救ひも下らなかつた。往生記に四障を挙げ自力さあるは注意すべきと思ふ。數量で進む所に不安は一掃されない。上人の念佛は數量本位ではなく、日常の生活を念佛化するものである。其處には「乃至一念」も平生は勿論、一遍の念佛にも決定往生を認め彌陀大悲の極地を把握されてゐる。

念佛は「様なきをやうこす」で、「こかくの沙汰せず」佛語を信じて、「たゞ申せば」三心、四修、五念も具足してゐる上人は申されてゐる。十惡の法然房、愚痴の法然房云はれた還愚の上人には、東西も知らぬ赤兒の素直さが如何に尊く思はれた事だらう。素より必ずしも赤兒がよく、一文不知が良いのではない。學の有無が念佛の根本問題でない事を明かにされてゐる。

「假令善き人の教へを蒙りて念佛して、地獄に墮つることも更に後悔あるべからず」にて只管師法然の教へに順ひ、彌陀大悲に縋つた親鸞。赤兒のやうな純な心で佛に南無することだ。

「ふかく信じてこかくの沙汰に及ばず、たゞ念佛を申すべきなり」

こかくの沙汰は禁物である。丸薬はたゞ丸飲すれば良い。「たゞ」の境地——一切を如來に任し切つた西行の「待たれつる入相の鐘の音すなり、明日もや生らば聞かんこすらん」何こ云ふ法悦の平和境であらう。

明遍僧都が天王寺に見えた時上人に發した質問に對し、「欲界散地に生を受けるもの心あに散亂せざらんや。煩惱具足の凡夫いかでか忘念を止むべき。その條は源空も力及び候はず。心は散り亂れ忘念は競ひ起るこ雖も、口に名號を唱へなば彌陀の願力に乗じて決定往生すべし」上人の答へは徹底してゐた。僧都が喜びの餘り挨拶も忘れて歸つてから心を鎮めて曰く「忘念をおこさずして念佛せんこ思はんは生れつきの目鼻をこり放ちて念佛せんこ思はんが如しあなこ

こゝし」ミ。熊谷入道や平重衡ミ上人ミの問答も思ひ出して尊い。人間から愛欲忘念を除く事は人間をなくする事である。生れつきのまゝの念佛こそ萬機普益である。〔誠に上人の自由な態度は何も無智に破戒に媚びられたのではない。そして又其處には「本願の念佛にはひきりだちをさせすけをさゝぬなり」ミ云ふ萬行隨一の念佛に鋭い「選擇」のメスの光る上人の念佛至上の主張が示されてゐる。〕

「往生を期せん人は決定の信をこりてあひはけむべきなり」ミ上人は仰せられた。これは己が胸に受取つて決定往生の信を専ら實踐の中に體驗して行く態度を教へられたものである。信に凝著して念佛を疎かに申せば行をさまたける。念々不捨者ミ行にこだはるミ數量が氣に懸つて、信が動搖して来る。信ミ行ミは相關々係にて止まるべきものでないと思ふ。こまが坐る。こまつたら倒れる。信ミ行ミが一如ミなつて動いてこそ本當である。親鸞の「善人なほ生る況や惡人をや」は味はふべき深さはあるが踏み誤るミ危険である。幸西等に至つては終りである。こもするミ一念の信で萬事終焉したミ考へ易い。信に凝著し過ぎてゐると思ふ。上人の態度をもう一度考へるに、上人は遁世僧團に生活し、圓頓戒相承の嫡流で而も三朝の戒師ミして、専門の念佛もさりながら授戒の請に六十頃まで應ぜられた事や、或は多少時代の數量念佛等その他の影響があつたのか、兎に角佛教の根本道德の上に立つてゐられる。が然し上人の信は決定してゐた。然し人間ミしての動搖や反省はある。反省は懺悔の因、信行への第一歩なりミ云ふ。ソクラテースは「汝自身を知れ」ミ。脚下照顧し自己の醜い相の把握こそ如來の慈悲を受取る姿勢である。口稱念佛——そこには慈光が渺がれる。それは觀經の「光明遍照云々」の意を歌はれた。

「月影の至らぬ里はなれども眺むる人の心にぞすむ」の三十一字に現はれてゐる。

み佛の光も不斷に私達を照し給ふが、佛を信ぜない盲人達には攝取不捨の光明は輝かない。實に遇斯光のよろこびは冷暖自知である。本願は受取る者に受取られる。

上人は念佛至上を力説し、日常生活の念佛化を奨め、民衆的無産階級的宗教を主張せられ、平等主義は更に當時佛教界から除外されてゐた女人往生を唱導された。「われたまひ死刑に行はるこも、この事いはすばあるべからず」金剛不壞の信念は、「年來の本意を遂げんこゝ頗る朝恩こも云ふべし」こゝ、悲しかるべき流涕を流刑さらに怨みこすべからざる朝恩なりと感謝された。何こいふ偉大なお方であらう。

墨染の聖者法然様！ 念佛の聲の滅びざる限り、否人類の生存する限り、尊師のお名前は念佛は不滅でありませう。